

平成29年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT29339

障害者雇用の大切さを学ぶ視点



開催日：平成29(2017)年 8月 12日(土)

実施機関：沖縄キリスト教学院大学
(実施場所) (南3-5教室)

実施代表者：近藤 功行
(所属・職名) (人文学部・同大学大学院・教授)

受講生：高校生 19名

関連 URL：

【実施内容】

09:45～ 受付(集合場所: 本学南棟3-5教室)

近藤功行、アンケートの説明開始

10:25集合 高校生18名着席(3名欠席連絡・1名追加参加・5名受付未到着)
(「近藤功行1人でソワソワ」=手伝い学生6名、全て近藤功行卒論ゼミ4年生女子。)

10:30～ 開会宣言
開始(定刻スタート)

担当者挨拶&お手伝い学生・スタッフ紹介&プログラム内容の紹介
「科学研究費」の説明について(研究代表者:近藤功行から)
「医療・保健・福祉」のテーマに沿ったお話(近藤功行から)
恵川龍一郎所長(=奄美大島からの外来講師)登壇。
(近藤:「皆さん、近藤さんに慣れる頃は夕方です。」。女子学生記録。)



恵川所長自己紹介・奄美大島「喜志統(きしとう)」のお話。喜志統とは、奄美大島統一のために、今帰仁城址から派遣された役人。恵川家は、その末裔。奄美群島内の島々は、琉球と深く関わっている。
→ 恵川所長の学生時代。大学:上智大学文学部哲学科、神学科、大学院:大阪教育大学教育学研究科へ進学する中、人生において、どういう経験や転機、様々な人との出会いがあったのか。そこを、語られる。

近藤功行:「研究は全部、「なんでかね～」から始まる。見えるものと、見えないもの。今回、テーマとしている障害者雇用率などは、目に見えないものとして扱える。」「障害」記載については、冊子でも同様であるが、定款通りの記載とさせて欲しい。ここを理解して欲しい。」

恵川所長から奄美大島についての説明。奄美大島も、鹿児島から沖縄まで通る、海の道、国道58号線が通っている。奄美大島内では、道路もある。



11:00～11:10 休憩

近藤功行、モデルチェンジして再開

ひらめき☆ときめきサイエンス視察委員・萩原なつ子教授登壇。ひらめき☆ときめきサイエンスを立ち上げるまで、また、スタート時からお話を行っていただける。

近藤功行談話

近藤功行:「近藤さんは、心臓が小さいのです。」(ニヤニヤ)
:「見えないものから、始めるのが研究です。」。ハンセン病寮所のお話。

11:10～11:55 バウムテスト配布 用意した用紙に絵を書いてもらう。→ (1)今と将来を結びつける内容。大きい木、木に実をならしていいから、書いてもらう。(2)障害者と健常者をイメージする記号を数秒イメージして書いてもらう。

恵川所長よりバウムテストの説明・高校生テストスタート(=テストとあるが、テストではない。)

近藤功行:「障害の文字は、法律用語に合わせている。そのため、今回の資料は全て漢字になっている。」
バウムテスト・・・(1)実のなる木をイメージ(2)障害を持っていない人を、○で表すと、障害を持っている人は、どう表すか。

奄美大島の話を出しながら、精神障害者・回復者のお話(=恵川所長から)
恵川所長:「福祉を学べることは、幸せなこと。」

11:55～13:00	お昼食休憩(=弁当・お菓子・飲み物を配る。受講している教室での昼食となる。)
13:00～13:45	<p>午後の部開始</p> <p>13:00 パウムテスト回収→(1)(2)どちらも2～3週間後に冊子をつくり、お渡し予定</p> <p>13:03～13:45 恵川所長のお話再開(=今回、講話になることより参加型で取り組みが必要なのは重々承知であるが、少しでも、奄美大島の知識を持って帰ってもらいたい意図あり。)恵川龍一郎所長の講話:精神科病院と精神障害/回復者小規模作業所、こうした精神障害者(&回復者)の就労の重要性を奄美大島から発信する視点。精神神経科病院が、奄美大島に1つある。恵川所長は、京都で施設長を行っていたが、奄美大島に戻り、単独で施設立ち上げを決意する。それは、病院関連の施設に勤務するのではなく、新たに立ち上げる。その困難さについてのお話あり。京都にいた時は、自閉症施設で勤務経験あり。自身の自閉症的要素も2週間で克服した経緯を話される。重度の自閉症の方は、喋れない。しかし、目が輝いている。テレパシーとテレパシーで話す。奄美大島に戻り、5年間児童相談所で働いていた。ここでも、テレパシーで話すことで、子どもが心を開いてくれた。そこから、子どもの錯覚が生まれる。これは、良い錯覚。この思い込みが、ポジティブな考え方を生み出す。これが、傷ついている心を癒す一番の方法につながる。福祉の世界、心理の世界には、純粋な心が必要不可欠。全体が結束していると、周りも結束してガンガン伸びていく。→スパイラル。これが福祉の醍醐味。これを感じないと、この世界にいる意味がない。京都にいた時、施設長に抜擢された。ただ、当時、単独で施設を立ち上げるには、約1億円が必要だった。恵川所長、28歳。そこで協力してくれたのが、障害者の子供を持つ社長さん。この社長さんが、固定資産税として貸してくれ、法人の施設ができた。「洛中洛外」…京都と関西の差別観、差別意識について語られる。東京では、奄美大島出身でも、差別されたことがなかった。恵川所長は、カウンセラーのアドバイスとして、保護司の対応も行ってた。保護司とは、少年院・刑務所から出てきた人のカウンセリングする役割がある。奄美大島に戻られてから、恵川所長は保護司にも就かれる。お金を貯めるため、恵川所長は、マンションも引き払って、15000円の家賃のお寺の間借りでお坊さんたちと8年間暮らした。そして、京都で2000万のお金を貯めた。その後、その資金をもとに、故郷の奄美大島に帰ってきた。その後、今の施設を立ち上げるまで、児童相談所・児童カウンセリング、夜警など出来ることを何でも行いながら働き続けた。しかし、施設がなかなか認可されず、貯めたお金に手を出しながら、どんどん貯金は減って行った。…山里八重子さん(=故人。糸満市内の勝連病院で精神保健福祉士、沖縄県精神障害者家族会会長。)のお話…施設が運営されるように、必死に動いていた人。彼女も障害者の子供を持っていた。「貧すれば鈍する」…貧しくても構わない。沖縄と奄美大島の違い…相当貧しい共通点があるものの、奄美大島は残念なことに、「何をやってもいいと思っていない。」フシがある。立ち上げた施設内で起こる。職員との裏切りなど。しかし、こうした負の連鎖を止めるのも、福祉の仕事。思いをはせることが大切。(→恵川所長のお話を、全員、食い入るように聞いている。)</p>
13:45～13:55	休憩
13:55～14:40	<p>(「近藤功行モデルチェンジ、2分遅れて到着！アウトー！」女子学生記録。)</p> <p>近藤功行談話 精神神経科のお話。(勝連先生の勝連病院。)MRIを、沖縄で初めて入れる。放射線科医師・教官2名が、設置テストに向かう。</p> <p>恵川所長より、「精神」についてのお話。精神障害者(&回復者)理解は、なぜ必要なのか。この点について、語られる。中身を思いっきり被(か)ぶせて、見事に別の施設をつくる人もいる。→明りの家で、ノウハウをおもいっきり盗んでも、後には潰れかけていく。精神障害の人たちは、言葉に敏感。それは、心的外傷・トラウマ。現在、作業所では、月桃のフローラルウォーターを作っている。10円でも高い賞金を払うことへの恵川所長の努力を、隣にいる近藤功行も適宜質問を入れながら、進行をはかる。</p>
14:40～14:50	休憩
14:50～15:35	<p>Q&Aプリントの説明=受講生からの事前質問、今日出てくる質問記載について。</p> <p>恵川所長のお話再開「(中略)言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。(後略)」(=受講生全員、恵川所長の会話に聞き入っている。)</p> <p>総括 受講生の皆さんからの感想や意見発表 (女子高校生からの質問あり)→以下は、おおまかなやりとり。質問内容は、もっと密な内容であった。 高校生:「恵川所長が頑張れる。原動力は何ですか。」 恵川所長:「健常者・障害者と分けて考えないこと。」 高校生:「地域でどのように障害者と関わっていますか。」 恵川所長:「成功事例を仲間としてつくる。しゃしゃり出るのはダメ。」 近藤功行から総括:今回、医療・保健・福祉分野の内容を学ぶ上で、精神障害者と回復者、その雇用の重要性を学ぶことは、とても大事。また、奄美大島から来られている恵川所長の存在は、全国どこを探しても、簡単に見つけられるものではない。今回のお話を通して、皆さんがまた大学に入られた後、恵川所長とのコンタクトを是非取ってもらいたい。今回の内容から、法整備は、身体・知的、そして精神の順番となっているが、こうした内容に着目して学んで欲しい。</p>
15:35	今回の企画に関するアンケート記入時間
15:45	『未来博士号』の授与
16:05	集合写真撮影(=「ひらめきい～、ときめきい～、さいえんすう～!!」(みんなでかけ声入。))
16:10	終了



【事務局との協力体制】

- 1) 企画推進課が主体となり、財務課を交えて、委託費管理と支出報告書の確認を行っている。
- 2) 企画推進課が学振への連絡調整と、提出書類の確認及び修正を行っている。
- 3) 受講者募集に関しては、過去の実績から代表者が行っている。過去に、沖縄県教育庁の後援を取り付けた経緯あり。そのため、この部分は、現在、メールやりとりで済むようになったため、企画推進課対応で行っていただいている。また、主催者は、公文書を取り扱うのが、教頭先生であるため教頭先生を中心に、時に校長先生訪問含め、沖縄本島内の全高校訪問を展開している。知古の教員が来れているなど含め、均一な目録での伝達が功を奏する。主催者不在時の対応は、企画推進課と協力して行う協力体制をとっている。

【広報活動】

前述したように、県教育庁はメール配信で、県立高校全校に到達していただくシステムが樹立した。前年度から、私立高校も送信が行くようになった。ただ、本プログラムは主催者が受講生獲得のため高校現場に足を運ばないと集まらない講座でもある。高校生の進学先とは、なっていないことも要因である。そのため、2015年度からは、沖縄本島内全校へ訪問を果たした。その他、離島校へは郵送をはかっている。隣県の与論高校へも案内を出している。当該プログラム理解は徐々に得られているが、この年度もこうした努力を払う。千kmを超える旅である。なお、大学では企画推進課と連携、大学HPで広報掲示、沖縄県内地元2紙への行事実施案内の記載をお願いをはかる。企画推進課タイアップで、実施。

【安全配慮】

特段、実験を伴うことはないため、「バウムテスト(=心理テスト)」実施の際の配慮、個人情報保護が必要となるため、この点については留意をはかる。大学内は、事故は、想定されにくい環境となっている。ただ、台風影響などで、立て看板=外などで強風時の配慮、中ではパネル転倒などがないように事故を防ぐ措置をとっている。スペース確保にも留意する中、台風到来が悩みの種である。なお、受講生と実施協力者(=学部学生・大学院生)を短期のレクレーション保険に加入させている。その他、実施者については、講座実施後も、くり返し行っている高校訪問での移動がある。自家用車運転である。交通安全が、留意される。実施者は、大学が加入している保険が適用される。外来講師は、これまでの実施措置を参考に保険加入を行っている。なお、途中で記載した台風到来影響が危惧される年度がよく起こる。外来講師が奄美大島から来沖するが、使用している機材が小型機のため欠航が早い段階で生じる。こうしたことを想定し、早めに来ていただく対策など実施(=ホテルが満室など、企画推進課が本対応でご苦労されている現状がある。前々回。)

【今後の発展性、課題】

- [1]本プログラム実施にあたり、沖縄本島内にある高校公立学校52校と私立5校の訪問をはかってきている。離島の公立高校8校と鹿児島県立与論高校に関しては、案内とポスターを郵送している。こうして、本事業の浸透をはかり、受講生確保を目指している。受講生を増やすことは重要と考えるが、障害・差別偏見などに挑む内容は、そう生やさしいものではない。ただ、毎回、プログラム実施後、当日の流れ、当日出た質問に回答を行った冊子を作り、受講生1人1人に渡せるように、お礼を兼ねて受講生のいる高校を訪問している(=高校サイドにも、当日配布の資料含めて、1冊贈呈)。今回、プログラム終了後、ある高校を訪問した際、受講生も連れてきて下さって、「とても、楽しかった。」、うきうきされている様子、また、会話が受講生だった女子生徒からあった。主催者としては、とても、励みになった。また、受講者の出身高校であるが、同じ高校から、例年、受講者が出てくることは、とてもよいことである。そのため、この年度、出席が無くなると、寂しい想いをすることとなる。ただ、今まで出てこなかった高校からの出席があるなど、色々な高校から、本プログラムを理解して下さる高校生が出るのがよいと考えている。これからも、これまで参加のなかった高校からの受講生がさらに、やって来てくれると有り難い。(註)受講生獲得にあたっては、定員が超えた場合には、「3年生を優先とする。1年生・2年生の場合、次年度、最優先でお招きする。」、と伝えて広報活動を行っている。
- [2]例年、新聞社取材があるなか、この年度、それはなかった。昨年度、参観者が4名と過去最多であった中、この年度も引率教諭1名が、終日、参加して下さった。この年度も、終始、最後まで皆、前を向き、しっかり最後まで受講する姿があった。同時に、受講生からの問も飛び出し、積極的に関わってもらえる姿を垣間見た。集合写真撮影時は、皆、和気藹々としている姿が見られることは、例年、共通していると思える。(註)この年度、日本学術振興会からの視察委員の同席があった。科研費説明などを、高校生に行っていた。[3]講話にならないことが望まれるが、近藤功行卒論ゼミ4年生の手伝い学生から、その日の感想で、「ワークショップを行うべき。」の意見が出ていた。このことについては、外来講師とも相談をはかっているが、共通見解を持っているが、「ある程度、中身が整った上でのグループ学習に関して、また、グループ討議は、『可』となる。しかし、今回のようなプログラムでは、無理と判断している。ここは、ぶれない意見である。そのため、主催者=近藤功行としては、科研費の研究還元、高校生対応の流れの中で、奄美大島から来られている外来講師の存在、精神障害者理解、就労の重要性にかけるその想いを、サイエンスとして共有していただきたい。それが、主催者ができる沖縄の高校生(=与論高校含む)への還元にもつながると自負している。
- [4]本プログラム実施にあたっては、県立学校60校へ、沖縄県教育庁から教育委員会後援事業として、PDFファイル配信が、全校に配信されるシステム作りを近藤功行が構築していた。しかし、私学5校は、担当課が違うため、また、5校であることもあり、こうした県庁からの配信依頼を実施していなかった。1昨年度から、どうしようか迷ってはいた。この年度、沖縄県教育庁県立学校教育課普通班を訪ねるにあたり、私学担当部局へ連絡をとっていただき、システム作りを行うこととした。先駆的に、誰かが行う必要あり。ようやく、実現出来た。結果、私立学校の場合、通信制含む合計8校に配信されることとなった。高校訪問は、従来通り5校(=全日制4校・広域通信制1校=本部町(※文部科学省所管)にある高校。)で行っている。今年開校などの広域通信制3校は、未実施である。
- [5]精神障害者、回復者の雇用を学ぶことは、受講生獲得で時間のかかることと考えている。そのため、次年度タイトルの検討を恵川龍一郎所長とはかった。今回、『障害者雇用の重要性を学ぶ視点』であったため、今年を受けて、次回は、『障害者雇用の重要性とその課題』、として応募することとした。本プログラムも今回で8回目の採択となった。さらに、飛躍をはかりたいと考えている。





【実施分担者】
なし

【実施協力者】 8名

【事務担当者】
金城 太 企画推進課